

## 慶林日隆教学の形成と特色（後篇）

大平 宏 龍

〔編者解説〕

当講演録は、法華コモンズからの要請を受けて、その主宰のもと平成三〇年（二〇一八）六月一六日（土）に東京新宿区常圓寺祖師堂地下講堂で行われた「半日集中講座」を収録したものである。今回は、本誌前19号に引き続き、その後半部分を学術講演録（後篇）として発表するものである。なお本誌19号に収録した講演資料との対照において便宜を図るために、各章・節題等の下部や本文中に〔資料、本誌19号〇頁〕という表記を挿入した。これは当資料の本誌19号に収録した頁数を指すものであり、資料原本の頁数を指したのではないことを断っておきたい。

大平 お疲れのところ申し訳ございませんが、あとしばらくお付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

(3) 日隆教学の方法について

(1) 著述内容から考えられる方法

A、日蓮遺文の見方〔資料、本誌19号51頁〕

日隆教学の方法についてということで、御遺文の見方のところを少し申しました。隆師は、まず日蓮遺文に依るといふことを第一とされているといふことなんですが、かつて立正大学の浅井圓道先生が「法体勝劣論の考察」といふご論文のなかで、日隆が用いている遺文の数は非常に少ないといふことを書かれまして、もしそれが本当なら、日蓮聖人の御遺文を能照能開とするというのはただ単にそう言っているだけになると思ひまして、本当かなと思つて、隆師の著述の大半を見て、そこにどんな御遺文が引かれているか、それを調べました。もちろん古い話なんですけれども、結果としてその当時一・二の数が検索できました。また重要なものがほとんど入つておりました。今日では一・二ほど確認しております。しかし隆師が持っていた写本が現在三・三通ですか、伝えられております（但し重複分二通）。そのなかで引用されてなかつたりするものもありますし、それから『開迹顯本宗要集』の九識証拠といふところに「一四八通の目録」といふのが出てきます。これは録内目録とされているので、録内目録の内容は知つておられた（無論、すべての遺文を所有していたか否かは別の問題となる。）といふこととでありますので、だから隆師の見た御遺文といふのはかなりの数になるだろうといふことが言える。それで浅井先生のご批判といふか、懸念は払しょくされたといふこともありました。

そんなことですけれども、ただ隆師の見た御遺文といふものは、恐らく転写本でありまして「本尊抄」なんかでも本文は今日の真蹟から見ると不完全であります。「五十余年」なんてのは、「四十余年」になつていたり。そういうこともありまして、恐らく隆師が見た御遺文のなかで真蹟を見たのは「八宗違目抄」だけだろうといふふうに思つています。そんな状況のなかで、とにかく三代三〇年間研究を重ねて、その結果が、今われわれが読んでいる著述になつたといふことになります。

## B、日蓮遺文と原始天台

### 外宜迹面と内鑑本密（資料、本誌19号52頁）

次に方法として考えられることとして、日蓮遺文と原始天台。この問題があるわけです。

これは日蓮遺文のなかに当然天台三大部等の解釈があるわけですが、それらのことについて、天台本来の意味で引かれているのか、それとも日蓮の義と同じこととして引かれているのか、そういうことをはっきりと区別すべきであると。こういうことを主張されまして、それを外宜迹面と内鑑本密というふうに分けられたわけがあります。これは「私新抄」からこういう考え方はありますけれども、これを最も典型的におやりになったのが「法華天台両宗勝劣抄」という書物であります。で、外宜迹面と内鑑本密、これは天台大師の「摩訶止観」にも「天親龍樹内鑑冷然」等と出てきますけれども、そういうことをも踏まえてこの分別がされます。普通本末六〇巻と言われます。もちろん隆師の著述のなかには台荆異目、天台と妙楽の解釈の違いも出ておりますけれども、ほとんどは三大部本末と言つて、同じようなこととして読んであるわけです。これにこの外適時宜、つまり像法天台の立場として述べられた、そういう文章面、これを外適時宜、外には時の宜しきに適うと。で、それは、いわゆる迹面本密である。つまり、迹面の立場が表になつて述べられている文章であると。本門のほうは、裏に込められている。これがいわゆる像法時代にふさわしい天台の解釈の立場だと。それに対して、内鑑冷然。これは文章の奥底にひそかに本門の意を述べられていると。で、これが末法日蓮の立場。だから、天台の書物に向かうときはこの外適時宜、つまり迹面の立場で見ると、それとも内鑑冷然、そこに込められた本密、つまり日蓮の立場として読むのか、これをはっきりと区別すべきであると。こういうのが外宜迹面と内鑑本密の立場であります。で、隆師のいわゆる原始天台の引用においては、これもいつも注意しながら引用されておりまして、特に外

宜迹面と内鑑冷然の區別を具體的におやりになったのが、これが先ほど来ご紹介した「止観見聞」一六卷。それから「三大部略大意抄」一七卷。他には、今度間もなく皆さんの御手元に届けられると思いますけれども「六即私記」三卷。こういったものの内容は、まず像法天台の立場で解釈をして、次はそれに対して、末法日蓮の立場で言うところ、こういう意味のことを書いたそういう書物になると。

恐らくこれは先ほど申しましたように、本迹一致勝劣の問題が非常に論じられた時代でありましたから、その天台の立場との関わりにおいてなぜ、本迹、この本門、本門と言われる日蓮聖人の立場が本迹一致と解釈されるのか、ということの研究の過程で恐らくこういう答えが出てきたのだらうと思われれるんですけれども。特にこういうことを注意する時に、御遺文としてこれが分かりやすいのが「四信五品鈔」のなかの一節であります。これは皆さんご承知と思いますけれども「四信五品鈔」のなかに「文句の九、初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに専ら此の経を持つ即ち上供養なり。事を廢して理を存するは所益弘多なり」ということこの本文において、宗祖が「廢事存理と云ふは、戒等の事を捨て題目の理を専らにす」と述べて、この理を直ちにこれは題目だとの解釈をしております。こういうふうには、この天台の典籍のなかにおいて、日蓮義から解釈すればこういうことが言われているんだということと分別して、述べている。これが必要なことなんだというところで、この原始天台の三大部本末六〇巻に対して外宜迹面と内鑑本密の二筋を分別すべきだというのがまず一つの方法になっていると思います。これがBのところですよ。引用文はもう読まれませんので、どうぞご覧下さい。

C、原始天台と日本中古天台（資料、本誌19号52頁）

それからもう一つ、今度は隆師は原始天台と日本中古天台の対照ということ、これを重要視しております。

ご承知のようにこの天台教学史というものは、中国と朝鮮と日本とそれぞれにあるわけです。中国の天台教学

を再興した六祖妙楽大師。そのお弟子さんの道遠・行滿、この方達に習ったのが日本の伝教大師でしょう。そして伝教大師のあと、例の日蓮聖人に獅子身中の虫と非難される覚・証・然というような学匠を経て、中古天台、本覚思想というのが興りました。で、こういう天台教学史を踏まえた上で、中国原始天台の考え方と日本中古天台の考え方を突き合わせて、そしてそれが果たして天台・妙楽の義に合っているかどうかということ論じている部分があります。ここに引いてあるのは「私新抄」の一部でありますけれども、ここで問題になっているのは四重興廢、これもご質問のなかにあつたので、そのところを特に引いてみました。四重興廢とは「法華玄義」の第二巻で論じているわけですけれども、これを日本の中古天台ではいわゆる止観勝法華というふうに、この観心を特に強調したあまり、教相を捨てて、観心為勝に行くわけです。そういうその四重興廢の解釈に対して、隆師はまず天台妙楽の義に帰ってそれはどうなんだろうかということを見るわけです。そしてその天台の「法華玄義」の四重興廢は、これは単なる教觀の異であつて、中古天台のような解釈とは違つたと。従つて日本の中古天台はいわゆる習い損ないの天台宗だと、こういうふうな批判を下す。そういうことが他のことにもあるわけですが、ここには四重興廢のことを取り上げてきましたけれども、要するにこういうふうに、この中古天台の義に対してまず原始天台の義と対照して天台教学史のなかで果たしてそれは本来の、天台の義に合っているかどうかということをもまず考えるわけです。

D、日蓮遺文と日本中古天台（資料、本誌19号53頁）

それだけではなくて、今度は隆師はさらに日蓮遺文と日本中古天台。今度は日蓮聖人の遺文とそれから日本の中古天台の義というものを対照することになる。これがDの立場であります。

ここに先ほど見ましたように中古天台の義に対してこれを「当門流の法門は御抄を以て能眼能照となし、玄文

止の六十巻を以て、所眼所照と為して、中古已来天台宗の法門に真偽を加え、邪正を分かちて捨邪帰正する法門なり」ということを実行するわけです。そして最終的には、日蓮聖人の義とそれから日本中古天台の義との同異を論じる。で、四重興廢でいくならば、中古天台の四重興廢の考え方というのは、『法華玄義』の本来の義に對しては、間違つてはおるけれどもです。ただ、それに対して日蓮義から見るとどうか。例えば『弘經抄』第三巻のところですが、資料五ページのD〔資料、本誌19号53頁〕の、一つ目のところですが、「觀妙を以て本妙を廢すと云ふは在世滅後・正宗流通・教觀の異なり。法体に二ありて、本妙より觀妙勝ると云ふにはあらざるなり。日蓮宗の意は爾前迹門は教のみ有つて觀無し、本門には教即觀にして教觀一致なる故に本妙即觀妙なり。故に本妙を廢して觀妙を取るべからざるなり。但し一品二半頭本の本果の本妙を廢して八品所頭の本因妙名字の觀心の妙を興すと云ふ事は、觀心抄の主旨、日蓮宗の宗旨なり。彼の天台宗の義と名は似たれども義は異殊なり。所詮、本妙を廢して觀妙を取るとは、本妙即所觀の境となり、觀妙即能觀の智と成るなり」こういうふうにより日蓮義と原始天台、原始天台と中古天台の解釈とを對照して、そして批判をしながら一方では日蓮義の議論というものが型式の面では中古天台に似ているところもあるというようなことで、このことを隆師は、いわゆる宗旨という言葉で説明しておりますが。中古天台と日蓮義の宗旨としては、違ふけれども形式として同じような場合もあると。

つまり、誤解を招いてはいけません。四重興廢の解釈で、『法華玄義』の本来の意味から言うと、最後は本門であつてそれに基づく觀心という意味だったのが、本門の教を廢して觀心だけを取るといふふうになるから、止觀勝法華となる、これは批判なんです。ただ、一連のこの教学の、何ていうんですか、成り立ち、構造を見てみると、要するにこれは尔前・迹門・本門、そして題目と。で、後述のように隆師のみる所、最終は題目

ですから、それは中古天台の解釈と型式は似ていると習合させるのです。で、こちらと同じような考えだということも言えなくはないと。そういう型式的な類似ということは、ある面においてはそれを認めているものはあります。

一番誤解を招いたのは、三大秘法の問題です。これは天台宗の上杉文秀さんという方がいますが、日蓮義は天台の口伝法門より脱化したものとされ、さらに浅井要麟さんは本門三秘が中古天台の三箇大事の脱化だといわれることの証拠に、「弘経抄」の文を引いておられますけれども、これも誤解がありまして、隆師は別の所ではいったん批判しているんです。「弘経抄」ではその三箇大事は、日蓮義でいえば三秘と同じようなことになることもあるというような言い方をしているんです。それで中古天台義をそのまま受けていこう言われたんですけども、それはちよつと違うんです。いったん批判しながらその上でその中古天台義に対し、日蓮義から型式の同じことを延べ、日蓮義の地平を広げようとしたものと私は思います。

ともかく、今見てきたように、隆師の方法論というものはまず遺文の立場をはっきりさせる。そしてその根本が「本尊抄」の結文だという、そういう立場を、視座をはっきりさせまして、そしてその立場から天台のいわゆる原始天台の立場を見る。そこにおいて原始天台の天台・妙楽の本末六〇巻の立場というものをこの外宜迹面と内鑑本密という両面において裁いて、そして天台の三大部本末における内鑑本密の立場というのは日蓮と同じだと、こういうふうを考える。そしてそういうことを踏まえた上で今度は天台教学の上で原始天台と中古天台を比較し、日本中古天台の義を批判する。そういうことをさらに踏まえた上で、今度は日蓮義と日本中古天台の義というものを対照するという、こういう方法を以て中古天台に向かっているということが分かるわけです。よく隆師の教学の根本は、台当異目だと、こういいます。天台とそれから日蓮義と、これをはっきり区別する。対峙さ

せてはつきり區別する。そういうことが日隆教學の根本だというふうに言われていくわけですから、それはそうなんですけれども、この従来の台当異目にはちよつと誤解があったと。つまり普通言われる台当異目の場合、台とは原始天台にあった。しかし日隆聖人の本當の台当異目というのは、これが実は日本中古天台なんです。中古天台と日蓮義とを対峙させて、そしてそれをどう考えるかと。これが隆師の最終目的だったように思います。だからもちろんそのために原始天台と日蓮と比較することはあるんですけども、最終目的は中古天台をどう考えるか。だから「法華天台兩宗勝劣抄」でも最終的には中古天台に対して、論ずる部分が多くなっております。

(2) 教學方法論の由来〔資料、本誌19号54頁〕

この方法論の由来について、これをどう考えるかということなんです、これはいろんな隆師の著述のなかから、そう考えられるということ、まだはつきりした中古天台側の証拠は私は確認していない、花野充道さんにも教えてもらいたいと思うんですけども。つまりなぜこういう方法を考えたかという、それはあちこちに同じ文章があるが、ここに引いたのは「私新抄」です。

「末代愚者四海に充滿し、一天下に周遍せり。かかる時分には内証は設ひ智者たりといへども、無智の過を恐れて、下機に随つて教法を施設するに、得益は称計すべからず。蓮師御出世の正意は是れなり。これを知らざる学者は、日蓮聖人の法華經の法門は始覚なり。相待妙の一分なり。觀心開会の法門はこれを存知せず。但教相計りにして深理なしと云ふ輩は、恐らくは蓮師の御門弟の中にもこれありと風聞せり。悲しひかな、蓮師の大悲を忘れて内証の幽旨を知らず。哀れなるかな、蓮師の善巧は謗心を恐るる事を。天台・伝教は能所俱に智者賢人なれば、教法の判教に畏れる所なし。末代の蓮師は智者のために文底に深理をうづみ、文相は愚者を本となして一切の判教を示す。愚者は開會觀心の深理を聞いて誹謗を生ず。日像聖人、門弟に示して云く、教証二道を弁えず

して観心の法門を言はん者は謗法に同ずべしと云へり。是れ則ち初心の行者を誘引する故なり。」

ここでは「私新抄」の立場としてこういうことを言われたんですけれども、そこで注目すべきところは「この日蓮聖人の法華経の法門は始覚なり。相待妙の一分なり。観心開会の法門はこれを存知せず。但教相計りにして深理なし」と。こういう批判が天台側からなされたということ。この天台側からの批判では日蓮義というものは始覚義であると。そして相待妙であり、本覚を知らず絶対も知らない。そういう批判がどうもあつたらしいです。これに対して直接のそういう批判書というものは田村芳朗先生もないよねということをおっしゃってましたが、これがそうだとこのがあるのかもしれないですけども、隆師の著述のあちこちにこういうことが書かれておりまして、そしてそのことを隆師は、日蓮義の存在理由に関わる問題としてこれを重く捉え、隆師だけじゃなくて、日存・日道聖人もそうなんでしょうけれども、要するにこの日蓮義は、始覚義だと。あるいは相對妙と。で、要するに本覚を知らない。絶待妙を知らない。こういう批判が天台宗側から日蓮義に対してあり、それを重く受け止めていることが、あちこちに書かれているわけです。で、このことをいったいどういうふうにすればいいのかということの意味合いにおいて恐らく隆師は、存・道両師もそうですけれども、中古天台義に積極的に関わって、そして日蓮義やそれから天台妙楽の本来の天台義からしてどう考えるべきかということをずっと追及してきた。それが、こういう方法を生ぜしめたのであるというふうに思うわけです。

これに対する答えは、隆師は日蓮義が本当の本覚というわけです。ただし、ここでは中古天台の本覚のチームと、隆師のいう本覚のチームの意味する所は違うと思います。共通の所もあるけれど、違う。なぜなれば隆師は本門八品が真実の本覚だという。だからこの本覚という言葉の説明として、普通は「本来の覚性」などと言われます。われわれが本来仏のこと、これが本覚です。またそういうことも、同じようなことも盛んに言われるんで

すが。本門八品が眞の本覚といわれることは、隆師の本覚は、これはこういう言い方が適當かどうか分かりませんが、根本の覚性、本當の意味での教義に基づく覚性、これが本當の本覚だと。こういう意味が一つあるだろうと。そうでないと本門八品が眞實の本覚であると教相に制限された本覚なんてのは本来あるわけないので、常に根本の覚性の意味を中心にみるのが、隆師の本覚。そういうふうには私は思っております。で、相待妙のほうは、これは例の「なかなか猶里近くなりけり、あまりに山の奥を尋ねて」の道歌を踏まえての話なんですけれども、隆師はこれについていろいろ論じて、結局これに対する、この日蓮義は相待妙だということに対する批判は要するに、日蓮義の場合は、絶対の上の相對。こういうふうには切り返すわけではありません。絶対の上の相對というタームは中古天台でも使われています。けれども中古天台で使う場合は絶対にポイントがある。隆師のポイントも、相對です。絶対の上の相對、日蓮義の相對はこれなんだと。だから單なる相對ではないと、こう切り返すわけです。こんなふうにしてその結論として、不二の上の而二だとか、絶対の上の相待だということを隆師が日蓮について言うわけです。

まず日蓮遺文の義を見定め、次に日蓮義と原始天台義との相違を確認し、更に天台教学史の上での中古天台の書物の主張というものを考える。そういう準備の上に日蓮義から、中古天台に向かうということとをされたのではないかと。これが私の仮説でありますけれども、この日隆聖人の取った教学方法論というものの成り立ちは、今申したことを考えなければならぬだろうというふうには思うわけです。で、こういう方法を自ら実施した結果できたものが隆師の著述。著述だけですと一八部、二七四巻ということになったわけでありまして、その教学思想の中心になったものが先ほど見てきた「本尊抄」の解釈、これが隆師教学の最も中心に据えられてしかも、その結文「一念三千を識らざる者に於ては仏大慈悲を起し五字の内に此珠を裹み末代幼稚の頭に懸けさしめたまふ」

本門の本尊というものを上行付囑によって末代のわれわれにちゃんと届けてもらえるという、そういう教学の根幹が明らかになってきたんです。で、成仏の種子というものは、これは「下種は、権乗を雑えず」ということがありますけれども、簡単に言えば、コシヒカリが食べたけりヤコシヒカリをまくしかない。そうすると、下種はやっぱり種子を選ばなければならんということですから、どうしても下種は折伏となる。それは化儀のみならず法体も折伏であるとするのが隆師の主張です。故に下種折伏ということを盛んに言われることになるわけです。

## 2、日隆教学の諸問題と特色

### A、本門八品正意論〔資料、本誌19号54頁〕

さて、残りの時間は、ご質問の問題に絞って少し見ていきたいと思います。

まず第一番目が、本門八品正意論であります。資料五ページの後半のところ〔資料、本誌19号54頁〕をご覧ください。本門八品正意とは「法華経本門は滅後末法の悪人下機の我々の為に説かれたのである」ということを意味するのが本門八品正意ということなんです。その理由は、本門八品の教義が上行付囑であり、それが末法下種の根拠の故である。日蓮遺文のなかで、上行付囑の教義は「本尊抄」で初めて顕説され、従って八品のチームが出ています。その後の遺文では、上行付囑の教義に基づく末法下種論が中心となるので、八品のチームは出ていなくても、義は八品正意論に基づく議論と考えられるということになるわけです。こういうことの証拠の一つとして、隆師の本門八品要品論というものの一部を見ていきたいと思います。隆師の著述のなかで、われわれがお経を唱える場合に、要品ということ、天台では四要品ということがありますけれども、日蓮門下で唱えるこの要品という考え方、これを教義と結び付けて論じているのは、ほとんど隆師以外にはいない、門下上代では。ですから、兜木正亨氏も要品を論じる資料としては、隆師の『弘経抄』を使っておられるわけです。そういうこともあ

るんですけども、この要品として隆師は「八品要品」本門八品を最要品として読むというのが一つ、そしてもう一つは、いわゆる要品というのは、現在では広要品と言っているのがこれに当たる、この二つを隆師は要品として説明をする、その説明は「弘経抄」の大意のところですよ。それと「五帖抄」第五の終わりのところに要品の説明が出ています。

なぜ本門八品を要品とするのか。その「五帖抄」のほうの一部分をそこに書きました。「尋ねて云く、本門八品を以て最要品と為す其の意如何。口伝に云く、観心本尊抄のなかに委悉なり」それは「本尊抄」のなかに詳しく書かれていると。「謂く、ただ地涌千界を召して八品を説いてこれを付嘱す、その本尊の為体云々」この文と「八年之間但限八品」、大いに次下に、「本門をもつてこれを論ずれば一向に末法の初めをもつて正機となす」それから「本門の序正流通」ここには隆師の注記で小さな字で八品と書いてある「ただ末法の初めをもつて詮と為す」ここにも八品という注記がある。これと、「末法の初めと云々」、「これが種云々」。「此はただ題目五字」と。この「七ヶ所の文は、一同して」同じように「本門八品を説いて南無妙法蓮華経を以て本化上行等に付し、末法下種に備え下機を助くべし」ということを説くなり「本尊抄」のなかで七ヶ所の文を挙げて、これが八品を重視する理由の根拠になるところだというふうには隆師は言うわけです。これを見て皆さん不思議に思うことありませんか？「本尊抄」のなかでは八品という言葉は三方所出ております。三回目のほうは、これは来還の八品ということで、「ただ八品の間に来還せり」のところ。ところがそこは引いてない、ここに八品というチームがありながら、隆師はこれを八品正意の証文に引いてない。ここに隆師の八品正意の意味があるわけです。つまり、八品正意というのは八品というチームがあるかないかという次元じゃなくて、上行付嘱されたお題目が唯一われわれを救ってくれるんだと、そういうことが八品正意ということの意味であるということを言っているわけです。ですから、

よく「八品の御本尊」等とないじゃないかとか、「八品の題目」と書いてないとか、いろいろそういう、八品のチームばかり問題にする議論も世間にありますけれども、隆師のいう意味が違う。チームがなくても、要するに上行付嘱という教義によって与えられたお題目によって、われわれの心に末法下種、それによって救われるんだということが説かれておれば、それは八品正意ということになるわけです。一カ所だけ引きましたけれども、こういうことで、隆師の八品正意ということの意味合は、そんなふうで、要するに、この法華経が滅後末法の悪人下機のわれわれのために説かれたのだと。そのことを八品正意というわけです。

その議論は先ほど言いましたように、この寿量品に説かれた久遠の仏種子というものを、末法のために下種の種子として、それを確かに末法に届けてくださる教義が説かれた、それが上行付嘱であり、本門八品のところにその地涌への付嘱が説かれているということにおいて、能説の経が本門八品、上行付嘱の能説の経としての本門八品ということが言われるけれども、大事なのは理論のみでなく実際に、上行付嘱によってわれわれのために題目がちゃんと用意されていると。それが法華経の本門の正意なんだということ。で、その理由として先ほど申しましたように、寿量品に説かれた医師の譬えのなかで失心の子供のために、お医者さんが父親が死んだということを書いて、使いを遣わして、そして是好良薬を飲ませて助かったというそのことを踏まえて、滅後末法の私たちのためにちゃんと本門の経文、天台の解釈で言うところ、本門の序・正・流通、すべてが滅後末法のための仏法だということになるわけです。

余談になりますけれども、私も学林に入った当時、八品正意ということで、朝晩、本門八品上行所伝本因下種の南無妙法蓮華経と唱えてましたけれども、どうも、八品のチームが出るというのは「本尊抄」一つしかない。ただ「日女御前御返事」にも一箇所出てきますけれども、これは遺文としては問題があるということですから、

他にはないのかなあと思つて、初めから終わりまでご遺文を読んで、八品というチームがないか探したことがありますけれども、一箇所も出てこない。そしたら当時は「縮刷御遺文」を使つてまして、その統集に「小乗小仏要文」というのがありまして、そこに八品という言葉はないけれども、本門八品以外を小乗とする図解があるのを見つめました。で、これは中山に真蹟があるものでありまして、ずっと法華経寺に格護されてきたものですか、恐らく隆師も見えてないんです。見てないのは確実だと思います。しかしこのなかに、八品以外が小乗だという図解がある。これを見て、ああそうかと思つて、今にしてみれば拙ない文章を書いたことがあります。しかし、こうして隆師の八品正意ということを見てみると、この「小乗小仏要文」という宗祖の真蹟の図解はどういうふうに解釈するんだろうといつも思うわけです。やっぱり八品正意ということを考えなければ、この図解は、解釈できないだろう。もし、寿量正意、あるいは一品二半正意、もちろん「本尊抄」で「一品二半以外は小乗教」といわれているわけですから、一品二半以外は小乗とする図解があつてもいいわけです。それがあつたかもしらんけれども、今はそんなのはなくて、八品以外を小乗とする図解があるということですので、その図解をもし解釈するならば、やっぱり八品正意のことを考えざるを得ないんじゃないかなあと、私は八品門流の人間としてそう思つております。もし他に解釈の方法があるなら、教えていただけたらと思つてんですけど、そんなことで、しかしそれは、隆師は見ておりません。そういうことで、そんなものが真蹟遺文のなかにあるということがあつた。八品正意については、流通正意とか、いろいろありますけれども、時間の関係で一応終えます。

B、法体二重説と法体三重説（資料、本誌19号55頁）

次には、法体二重説と、三重説のほうにいきます。これは先ほどの「本尊抄」の解釈のなかで、隆師が、最初は二重説だったけれども、三重説になつたということを書きました。問題になるのは、先ほど申しましたように、

この「開目抄」の終わりのところの「ただ天台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ、この一念三千も我等一分の慧解もなし」のところですね。これに対し、隆師は最終的には、「今家の宗旨」と科文をつけたわけですが、れども、当初はこの「天台の一念三千」は、文字どおり天台の一念三千（迹門の一念三千）と解釈しておられます。二重説のときには。ところが三重説になって変わったんです。そのところ法体二重説でイと口の、「一念三千」はともに理具三千なる、と。これは日隆の『私新抄』第一〇卷（『宗全』第八卷）二六九ページに明らかに、二重説で理具三千と解釈しているわけです。そして浅井圓道先生も『観心本尊抄』二六三ページに理具三千と解釈しております。二重説を取るとそうなる。ところが三重説になりますと、ともに事具三千と解釈するわけです。そこで、この「本尊抄」の意は「迹門流通止観一部の理具三千を以て、本門流通本因果国依正互具の事の三千につつみ、種子の法を顕し、信智の者に擬し、又万人の為に事具の三千を以て事行の妙法蓮華経」この横に口業と小さく注が入りますが、「につつみ、愚者に授くるなり、此のときは事理の三千は体玄義、妙法蓮華経は総名なり」と、こういうふうには、主題に従って説き方はいろいろですけれども、要するに「四帖抄」以降では、イのほうも口のほうも、隆師は、これは一念三千は事具三千、つまり本門の三千と解釈しているわけです。

迹門の実相のほうは経文でいきますと十如实相、方便品の十如是のところに示された、つまりこれは諸法実相です。本門では寿量品の六句知見の所、これも諸法実相として解釈されている。六句実相ですね。これは同じく迹門の理具一念三千、諸法実相。それに対して本門の三千はどうかというと、これは「開目抄」に、真の一念三千というところに、この、本因本果。ですから本門の三千の依文は、寿量品の三妙の文ですね。「開目抄」では、本因本果、これが表になっておりますが、そのちよつとあとのところで本土が論じられております。で本土は裏となっている。それに対して「本尊抄」では、四十五字（今本時婆娑世界…）のところですね。その順序は、本

国土、本果、本因となつてますけれども、要するに『本尊抄』では本因果国、この三妙で本門の実相を表す。こういうふうには実相の見方として迹門との違いもはっきり認められませんが、さらにこの本門の実相はこれは一分の慧解もなし（『開目抄』）ということ、ここに題目が、これが唯一の成仏の法と。これが隆師の言う結論です。

ただ、この題目も本門三千と全く無関係というわけではなくて、そこは能所関係ですから迹門も本門の所撰、本門の実相は題目の所撰ということで、この題目は能撰能裏ということ。これは総名。ですから、きょうは下種論をやるわけではないんですけども、下種の法体としては事具三千で言えば、因果裏の事具三千が所裏の三千とされ、因が表となつた成仏の種子、つまりそれは、必ず題目に含まれた形で与えられる、こう考えるんです。

ともかく法体三重説というものが、日蓮聖人の本意だというのが隆師の確立した立場であります。それには先ほど申しましたように、『開目抄』に対する見方が恐らく二重説ではなくて三重説を取らせた一因だろうと、私は思うわけです。そのことはあとでまたちょっと触れたいと思いますが、ともかく隆師の確立した著述の立場は法体三重説というものを、これを基底にして論じられておりますから、それを確認しないで二重説のままであれば、隆師の、たとえば本迹論に対する誤解がありますけれども、そういうものが出てくる可能性があるというふうには思われて、このことはまた、別の機会に何か書きたいと思つています。ともかく日隆教学の特色として、この法体三重説というものを、ぜひご注目いただいたらと思います。

#### C、四重興廢（資料、本誌19号56頁）

次は、四重興廢の問題です。これも先ほどの方法論でちょっと触れましたけれども、四重興廢のことは『私新抄』に詳しく述べられておりました、先ほど見ましたように、『法華玄義』第二の意味するところ、それから

日本中古天台が論じている四重興廢の意味するところとを対比いたしました。中古天台は習いそこないであると。日本中古天台に止観勝法華とするのは誤りであると、こういうことをまずはつきりと批判をいたします。しかしその上で、先ほど申しましたように、「法華宗意用四重興廢耶」というその項目のところでは「昔迹本観の次第は、日蓮義に習合すれば、尔前、迹門、本門、題目の次第に対応する故に形式において四重興廢を用いるともいえる」と。というような意味のことをまた述べてもおります。なぜこんなふうにされたかというところ、結局これは、隆師が当時の日本を覆っていた、中古天台本覚思想というものに対して、日蓮義というものを対峙して、日蓮義の地平を広めようと、そういうことで中古天台義のなかでも用いられるものは用いようと、そういうふうにごうに考えたのではないかなあと私には思われるわけです。ともかく四重興廢に関して隆師の立場はこういうふうには、「法華玄義」の本来の意義に照らして、中古天台が止観勝法華と解するのは誤りだと。もちろんこの背後には「立正観抄」という御遺文が援用されておまして、「立正観抄」は、隆師は中古天台批判に必ず引かれる、そういうものになっております。ですから「立正観抄」については、隆師は親撰とみて使っていることは間違いないと思えます。そういう問題がありますが、ともかくまず四重興廢をまず批判する。そして今度は日蓮義との対応において、習合というような言葉を使っておりますけれども、形式的には同じようなことであることと論じておるといふことがある、と。こういうことが四重興廢に対する見方です。

しかし、この日蓮聖人の本門の教相・観心の立場というものは、あとで論じますけれども、これは教即観、観即教ということであって、その点において、日蓮義の教観は論じなければならぬ、というのが隆師の基本の立場であります。四重興廢もまたその意味において批判をしておるといふことになります。

次は、Dの教判と本迹。隆師の教相論、特に本迹論の基本的立場は、これは先ほどの「私新抄」がよく引かれるわけですが、日像門流の口伝として種熟脱の三益をもつて判ずるのが、これが一番大事なことだという、それが、あちらこちらに出てきます。それに関連して、根柢としてよく引かれるのは、「本尊抄」の「設ひ法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず。還つて灰断に同じ。化に始終無しとは是れなり」で、これに類するものは他にもあります。「化道の始終種熟脱」と、隆師は常に引用しますが、化道の始終、種熟脱を説かない、そういう教えというものはそれは、二乗の化身滅智のようなものである。化道の始終、種熟脱を法華経が明らかにしているから、末法下種の法義も確實なものとしてわれわれはいただくことができるという、という論理がそこにあるわけです。従つて、隆師の三世十方に対する立場は当然これは三五実説ですね。仮説とは認めません。実説です。そして、そういう教判論の基になるものが、一つは「稟権出界抄」の「日蓮が法門は第三の法門なり」これは真蹟のある日蓮遺文であり、日蓮の真意として間違いないと思えます。これが一つ。で、もう一つは「諸経は五味、法華経は五味の主と申す法門は本門の法門なり」これは「曾谷殿御返事」、異称は「焼米抄」という御遺文です。これについてはあちこちで申しましたけれども、これまでは真蹟もなければ、いわゆる直弟子の写本というものもなかったんですけれども、最近、ちょっと前になります、興風談所の方の報告では、北海道のお寺に、これの真蹟断簡があるということが発表されました、もしこれが真実ならば、この「焼米抄」は、資料としては重きを増してくるということになるわけですが、隆師はこの、「曾谷殿御返事」の「諸経は五味、法華経は五味の主と申す法門は本門の法門なり」というこの文によつて、五味主の教相というものを論じております。で、この五味主の教相というものは、隆師の著述のあちこちにありますけれども、一往は、過去下種のところを

本門とするというふうに捉えています。つまり、「曾谷入道殿許御書」にある三五下種、三千塵点五百億塵点の過去の下種ということ、先は三五を分けず三五下種といって、その、まとめて言われたところは、過去下種のところを本門とすることであると。これが一往の釈であつて、再往は、三・五を相對して眞の久遠をとる、この久遠下種が眞實の本門であるとみるのが「第三の法門なり」ということであると。従つて最後は久遠下種が眞實の本門、つまり本地である。こういうのが隆師の教相論です。日蓮聖人のご遺文は、この三益論、種熟脱の三益。下種益、熟益、脱益という種熟脱の三益を論じながら、三世十法微塵の經教というものを論じていく、そういう三種教相論がまずあつて、その上に五味主の教相というものがあるわけですが、三種教相というものはこれは、天台のほうでいっていることなんです、天台の三種教相は、これは全部、權実判。「教相を三と爲す。教とは、聖人、下に被むらしむるの言なり。相とは、同異を分別するなり」というその三種教相の、一番目は皆さんご承知のように根性の融不融の相、二番目は化道の始終不始終の相、そして三番目が師弟の遠近不遠近の相ですね。こういうものをもつて天台は法華經という經が他の經と違うということを論じるわけですけれども、これを、三種教相の台当異目を考えますと、天台は全部三種ともに、權実判として見るわけです。これに対して当家は、第一と第二は權実判、そして第三と第二の一分、これが本迹判。こう隆師は見るわけです。ここに種熟脱の三益を根底として、これをもつて教相を判じていく、これが隆師のまず根本の考え方です。日蓮聖人のご遺文でも、初期のころには三種教相に関することがよく出てきます。で、聖人の教相論は、われわれの習う通仏教の見方とはちよつと違う立場ですから、インドの釈尊の五時の化道、というものがまず根本と考えられている。これは、尔前と法華ですね。このとき尔前が權で法華が実、これが第一教相。そして、化道の始終不始終の相が今日一代五時のもととされる、これは皆さんご承知の、法華經の三周説法の第二、因縁説周。そうする

と、化城喻品の説によってこの、大通下種というのが今日の教化の基だとかういうことが明らかになるといふこととです。それ以来が三千塵点です。これがつまり、第二教相です。そしてさらにこれが、本門寿量品の、五百塵点の当初、三世十方微塵の経教の根本がここに明かされた。これが久遠下種です。久遠下種が出てくると、先の大通下種はこれは大通結縁ということになります。つまり熟益の一分となる。これが第三教相で、これが「第三の法門」の根拠です。こういうふうには隆師の三種教相の見方というものは、一般の仏教史とは違って、久遠本仏の最初の下種を根本とする立場で見ますから、そこで、今日の法華のところから過去にさかのぼっていく、こういうのが、これが三種教相。「四帖抄」では迹中から本地への方向の教相だという説明がありますが、要するに三種教相、こういう方向です。これは廃立関係なので三重教相とも言います。で、この久遠下種、これが根本の下種のありどころだということが確定しますと、これを本地として、他の経教が位置付けられることになります。これが第三の、日蓮のいう第三の法門になる。ですからその方向は、今度は本地から迹中へと、先の三種教相と逆になる。これが五味主の教相。久遠下種をもととして、一切の諸経を三益で位置づける。そこで本地と迹中。これが隆師の教相論です。先ほど見ました、第五三段の流通分の本門一往の釈のところですね。「久種をもつて下種と為し」っていうあそこのところ。いわゆる一往これを見るときは「久種をもつて下種と為し、大通・前四味・迹門を熟と為して、本門に至って等妙に登らしむ」この「本尊抄」の文に基づいて一切の諸教を図解したのでこの六ページの半ほどの図解です〔資料、本誌19号57頁〕。根拠は「本尊抄」の先ほど読んだところです。そして、種熟脱の三益をもつて判じていますから、この本地のところは「久種をもつて下種と為し」と宗祖はおっしゃってます。その下種のところ、これが根本になるんです。で、それ以降の経教は熟益と脱益。「本門に至って等妙に登らしむ」とは脱益。種熟脱の三益をもつてみる経教というのがこの第三の教相。久遠下種の題目

が本地。そしてそれ以外は迹中の諸教。これが日隆教学における本迹論です。われわれは本迹論というと普通は法華經の迹門と本門の間の問題になると思うけれども、隆師は一往それも論じますが、真意は三世十万微塵の經教のなかの根本、下種のありどころを本地、それが本門。そしてそれ以外を、つまり熟脱の諸教。熟益や脱益に資する經教として位置付けて、それは要するに迹中だと。本地からの垂迹として位置づけられた教、迹中だとこゝろみている。教相論としてこれを五味種の教相と言います。ですから隆師の本迹論というのは、こういう本地・迹中の勝劣が真意です。

ここまで来ましたから先ほどの上行付嘱の義を見ていただきますと、こういうことで諸教は整理されて、久遠下種が根本だというところが出たならば、この久遠下種の種子を末法のわれわれに与えてくれる、それが上行付嘱の教義です。ということとはつまり、われわれは、「今日一代」より経過して、正法、像法、末法。この末法の始めに日蓮聖人、われわれがいるわけです。で、われわれの成仏が問題なんです。私たちへの末法下種が、問題になる。どうするか。こういうふうには化道の始終、種熟脱を追って過去における種熟脱の經教の道筋が明かされる。そして「本門に至って等妙に登らしむ」、そこで確かな脱益を得た。ならば、その種子を末法に持つてくればそれでわれわれの成仏も同じように実現する。故にその久遠下種の種子を新たに末法に持つていくために法華經の本門に説かれているのが上行付嘱。で、この上行付嘱によって、末法の今に末法下種がある。これが隆師教学の全体像です。非常に荒っぽい理解ですけども。ですから、あとで書いてありますけれども、日隆教学のキーワードというものを考えるときに、その全体系を考えるならば、日隆教学の根本の三義は、久遠下種、上行付嘱、そして末法下種、この三つです。で、これは隆師は全部お題目によると考えます。こここのところから頭本論の問題にも関わってくるわけです。これまたあとでちょっと申しますけれども。

ともかく、教判と本迹ということとは、隆師は「本尊抄」を根拠としてこんなふうと考えているわけです。「本尊抄」だけではなくて、『稟権出界抄』の第三の法門。それから『曾谷殿御返事』にある「法華経は五味の主と申す法門」。これが隆師の教判論、教相論の重要な根拠になっているわけです。

#### E、教主釈尊と顕本論

イ、顕本の起りと上行付嘱〔資料、本誌19号57頁〕

こういうことで、その次、教主釈尊と顕本論のほうへ行きたいと思います。そもそもこの顕本論というのはどういうことで論じられるのでしょうか。普通、顕本論というと釈尊の無始無終。こればかりが求められるんです。しかし、釈尊が自分は久遠であると言われる。それはなぜか。そこに書きましたけれども、法華経寿量品の釈尊の顕本は、娑婆世界の衆生教化の為、インド出現の釈尊が入滅されたことの説明として、この妙法華では、「方便現涅槃」とされて、その上で釈尊の寿命は実は久遠であると示される。これがこの顕本論の起りとして重要なことです。荻谷定彦著「法華経（仏滅後）の思想」という書物がありますけれども、これは法華経の原典研究の立場から、その結論を法華経は仏滅後の衆生のための経であるとしておられるんです。これは日蓮聖人が「本尊抄」や「法華取要抄」に、法華経は誰のための経か、末法下種のための経だとかうおっしゃる、それに同じことなんです。で、荻谷先生は原典研究の方からの分析ですが、しかしこの、原典研究の上で論じられる顕本論というのを考えるときにも、この、なぜ釈尊の寿命が久遠であると示されたかといえ、それは要するに寿量品の医師のたとえにあるように、釈尊は死なねばならなかった。そうしないと衆生が救えないと。教化できないということがあったから釈尊は入滅された。そこに釈尊の大慈大悲があると。しかし、本体としての釈尊は本當に死んだんではないんだということにはなる。ともかくそういうことで、この顕本論ということを考える場合に、

これまでの一般の方々の考えは、仏滅後というために釈尊の久遠の寿命が示されたということがどうも、不明瞭というふうに思われるわけです。で、隆師はです。この「本尊抄」の、あるいは「法華取要抄」の、日蓮聖人の法華経観。末法の日蓮等のためのお経。まして本門は序正流通共に末法の日蓮等の為という、そういう遺文を受けて、顕本ということもです、結局は上行付嘱が釈尊の出世の本懐であったと、こういうことを隆師は言われるわけです。たとえば「此の上行付嘱を以て本門正宗と為し如来出世の本懐と為す」と『三大部略大意抄』にこんなことが言われております。また「此の本因妙とは釈尊に十法界の依正三千遍照の功德を具す。仏界の辺をば本果妙と名け、釈尊と名くるなり。九界の辺をば本因妙と名け上行は是れ釈尊の教弥実位弥下したまふ滅後応同の大慈大悲の尊形を上行と云ふ。上行と釈尊とは同体一身にして因果を分けて父子の相を示す。故に釈尊の御身を滅後末法に分けやれば上行なり、種子は釈尊にあり、種子を下すことは上行にありと口伝するなり」と、ここに一仏二名ということが出てきます。だから、この顕本論ということも考える場合にも、日蓮聖人は上行付嘱ということの観点からこれを考えているということがまず注意をされるわけがあります。

ロ、日隆教学における顕本論の要点（資料、本誌19号58頁）

a、法華経寿量品の釈尊は三身即一正在報身であり、寿命は無始無終である。（資料、本誌19号58頁）

日隆教学における顕本論の要点というのを見ますというと、これはあれですね。株橋日涌先生が曾つて立正大学で講義された内容である「日隆聖人の寿量本仏観」にありますけれども「法華経の寿量品の釈尊は三身即一正在報身であり、寿命は無始無終である」と。要するにまず隆師はこの三身即一正在報身。報身正意。そして、しかもその寿命は無始無終だ、こういう立場を取っているわけです。

b、本仏釈尊の大慈悲は、滅後末法の衆生を救うことにあり、その為に上行付嘱を説かれた。それは「下種の顕本」ともいわれる。〔資料、本誌19号58頁〕

そこで「本仏釈尊の大慈悲は、滅後末法の衆生を救うことにあり、その為に上行付嘱を説かれた」。従ってそれは下種の顕本ともいわれる。「弘経抄」に「顕本し畢れば諸仏悉く名体絶し已れば釈尊一仏と成つて余の諸仏これなしと顕本するは、下種の顕本にして、本門八品上行要付の顕本なり」とこういうことを言われている。

c、報身の無始無終は無量無辺の五百塵点の故〔資料、本誌19号58～59頁〕

それならば、その正在報身でありながら、この無始無終であるということは、どういうふう書いてあるかというと、それが「本因妙以前に無量無辺の釈尊上行師弟自体顕照の自受法楽の説法これありと雖も自行の成道なれば名体も替らず唯是れ釈尊上行の一仏一菩薩の本因本果なり。故に能譬の五百塵数も本因妙已然に無量無辺の五百塵数これあるべし。其の中の一箇の五百塵数を經に挙げたるなり、実には本因妙已前に無始久遠の五百微塵これあり、随つて無量無数不可説の本因妙釈尊上行の出現これあり、故に無始の久遠と云ふなり」とこういうふうに示されて、この無量無辺の五百塵点を經にいるということにおいて無始無終である。こういう説明をしておられるんです。

d、釈尊は一仏二名〔資料、本誌19号59頁〕

このことについてはあとで再説することにしまして、要するにこんなふうに顕本論というのを考えますから、そこで隆師におけるこの釈尊観として「一仏二名」ということが言われるんです。で、本来「一仏二名」という語は、これは等覺・妙覺について言われたものでありまして、隆師もそれはちゃんと踏まえて、ここですね、言っておられてるわけですが、その「一仏二名」というタームを使った理由は、隆師は釈尊の大慈大悲の教化の

在り方を一仏二名と表現する。その根拠は上行付囑の重視にある。これがまず第一ですね。さつきも言ったように上行付囑が釈尊出世の本懐である。釈尊の大慈大悲により上行付囑が為されたところという考えですから、まずそれが大事。そして、さらにこの十界互具論をふまえて、「本尊抄」の解によって、本仏の本因妙を地涌の菩薩と解する。これは隆師が「弘経抄」のなかに言っておられることですが、浅井圓道氏も「本尊抄」講義のなかでやはり同じように触れておりますが、要するに「本尊抄」のなかで事具一念三千が、これが「一分の慧解もなし」。それではどうするかとなると、いわゆる三十三字の自然讓与が説かれるわけですが、そのあと、自然讓与によって、題目を受持することによって功德をいただく、つまりその一念三千、事具三千を、理解して体理を証得するということと同じくなるということにおいて、われわれの心に釈尊を具す、そしてさらには、この地涌の菩薩をも具すということ述べられたところ、つまり寿量品の文に於て「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古佛なり。經に云はく我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず。復上の數に倍せり。我等が己心の菩薩等なり地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり。例せば太公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷属。武内の大臣は神功皇后の棟梁、仁徳王子の臣下なるが如し」とありまして「上行・無辺行・淨行・安立行等は我等の己心の菩薩なり」と、このところが基となり、釈尊の本因妙の姿が上行だと。こういう解釈がここに出て。この「本尊抄」のこの文章を根拠として「本仏の本因妙を地涌の菩薩と解する」で、その一仏二名の救済ということは、これは、寿量品の医師譬の失心の子に対する救いに基づくことでありまして、その本意というものは、先ほど引用したところに明了です。こういうことで、隆師のこの釈尊観として一仏二名というものが言われたのは特異なように言われるんですけども、上行付囑ということを重視して、そして「本尊抄」の文を根拠として、釈尊の、この本因妙の姿を上行、本果抄の姿は釈尊と、こういうところから一仏二名と

言うことができる。しかし、あくまでこれは一仏のところのポイントがあるだけでして、二名にポイントがあるわけではありません。隆師の著述のなかではこの一仏二名ということを前提として、その三益の教化ということに関して、釈尊が熟脱の教主、上行は下種の教主というような、そういう表現のところがありますから、何か釈尊が脱仏みたいなことに解釈する向きもありますが、そうではない。釈尊一仏の大慈大悲がこの末法の衆生を救うために、どうしても釈尊が、インドの釈尊は身を隠さなきゃならない。そのために、釈尊の命を受けた地涌が必ず末法のために題目を受けて、そしてその付託を実現する為に末法に出現してくださるという、この教義が上行付嘱でありますから、それを考えたときにこの一仏二名という言い方がされているということでありまして、決して釈尊をいわゆる、釈迦脱仏ということの意味で使っているわけではありません。ここところは注意をする必要があります。と思います。

e、隆師の顕本論に対する研究〔資料、本誌19号59～60頁〕

こういうことでありまして、結局、隆師の顕本論についてというご質問は、多分、この隆師の顕本論に対する批判がありまして、これが隆師教学に対する一番の難問であるために、その質問が出たんだろうと思います。隆師の顕本論に関するについては株橋諦秀（日通）先生の「寿量本仏観」とか、石田智清（日信）上人の「日隆聖人研究ノート（二）五百塵点について」それから芹沢一男（泰謙）氏の「慶林房日隆の時間論―五百塵点実説論について―」などという論文がありまして、要するに隆師のこの無始無終と、それから正在報身との関係をいろいろ論じておられます。しかし、それに対して執行海秀さんは「日蓮宗教学史」において、日隆の顕本論は「繰り返し顕本」である。そして望月さんはそれを受けまして、日隆の顕本論は「形式的誤謬がある」と。教学的に言ってこれは誤っているということ、言われた。最近では北川氏が、この両氏の説を踏まえながら「日隆

は五百塵点劫に固執してなぜ繰り返しを説くのか」と。「一個の五百塵点によって久遠性に到達できぬなら、くり返しても到達できない。結局、五百塵点方便説となる」等というような批判をされています。こういうような批判があることは事実であります。

f、日蓮の顕本論

(a)、田村芳朗「親鸞、日蓮両師における久遠仏思想の対比」(資料、本誌19号60頁61頁)

こういうことに対してどう考えるかということになるわけですが、これを考えるにはやはり、日蓮聖人の顕本論というものにさかのほって、考えてみる必要があると思います。これを考える上で一番参考になるのは、田村芳朗先生の「親鸞、日蓮両師における久遠仏思想の対比」という論文でありまして、ここでは日蓮の「二代五時図」、資料のfの(a)になるんですが、これを引かれて、「天台宗の御本尊」そこに「久遠実成実修実証ノ仏」とありますね。そして、三身を論じたところの「久成ノ三身、応身、報身、法身、無始無終」とこういう図解を挙げられます。田村先生は「これらによって彼の」とある彼とは日蓮聖人、日蓮聖人の「解釈する久遠は無始で、しかも理体本覚法身の無始無終ではなく、実修実証の具体性を有する事仏である」とれよう」と。「実修実証と無始とをいかに結びつけるか、これが日蓮に投ぜられる第一の疑問となるのである」とこういうことを言われている。つまり、日蓮聖人のご理解自体が問題をはらんでいるのではないかというのが田村先生のご指摘です。で、ただ、そこに「天台宗の御本尊」とありますが、これは先ほどの「開目抄」にあった「天台の一念三千」の天台と同じで、これは明らかに天台宗とありますけれども、これは法華、天台法華ではなく日蓮法華宗の意味で言われているものと解釈しなければなりません。これは北川氏も同じような解釈をしております。ともかく日蓮聖人の顕本論において、やっぱりこの田村先生が言われた、このことは、これは重く受け止めなければならぬ

ろうというふうに思うんです。で、それを、だからまずそれが果たして実修実証と無始無終が果たして両立するのかどうかということは、ちょっとおきまして。ともかくこれを、日蓮聖人の顕本論の実義として受け取らなければならぬということとは言えるだろうと私は思っております。

(b)、「本尊抄」において〔資料、本誌19号61頁62頁〕

さらにこれを考えるについて「本尊抄」においても「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所頭の三身にして無始の古仏なり」と。こう「無始」ということを言われながら、あるいはまた「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず未来にも生せず、所化以て同体なり」こういうふうは無始無終ということを言われる。一方では「如来滅後五百歳始観心本尊抄」あるいはまた「此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては、仏猶文殊薬王等にも之を付属したまはず。何に況んや其の已下をや、但地涌千界を召して八品を説ひて之を付属したまふ」と。あるいはまた「本門を以て之を論ずれば一向に末法之初を以て正機と爲す。所謂る一往之を見る時は久種を以て下種と爲し、大通・前四味・迹門を熟と爲して本門に至つて等妙に登らしむ。再往之を見れば迹門には似ず、本門は序正流通俱に末法之始を以て詮と爲す。こういうふうな文を見ます」「本尊抄」においても、一方では無始の古仏とか常住の浄土と言われながら、一方でこの如来滅後の末法の救いという所に重点を置いた論議をされているわけです。だから、この顕本論ということにおいても日蓮聖人が、両方の立場から見えておられるということは、これはやはり考えなきゃならないと思う。

(c)、「春初御消息」〔資料、本誌19号62頁〕

それとともに私は、日蓮聖人は果たして五百塵点を、一個の五百塵点とでしか論じられなかったのかいうふうに思うわけです。で、「春初御消息」というのがあります。これは残念ながら真蹟もありません。写本は本満寺

録外でありまして、そういう意味では文献的には弱いものですけれども、です。このなかに説かれた文章に「すでに読経のこえもたえ、観念の心もうすし、今生退転して未来三五を経ん事をなげき候つるところに」とあります。非常に寒くて日蓮聖人は困られたその状況のなかで、この今生を退転して未来三五を経んことを、このままだと自分もまた未来三千塵点、五百億塵点という長い時間、退転し、流転しなければならぬという、そういう思いを持ったというようなことを述べられております。これは、ここの消息自体は、これは真蹟のないものでありますけれども、しかし日蓮聖人のこの実修実証の仏、さらには末法に対する教化とかを考えたときに、やはりこの宗祖の五百塵点というものは、まずは教説の上の五百塵点であり、つまりそれは先ほど見た久遠以来の五百塵点ですけれども、この、そのあとに末法下種ということが説かれて、その末法下種を受けたわれわれが、これを取り外したらどうなるか。そういうことの上に考えたときに、過去の久遠下種において、その下種を受けてすぐこれを信受した者は仏になる。しかし、下種されたわけですけれども、それを退本取迹、本門を退し迹門を取ったり、退大取小、即ち大乘を退して小乗を取ってしまったというようなことにおいて、折角の下種を結局、退転する、その期間として宗祖は三五塵点という時間を考えておられる。これは明らかであります。ですから三五塵点という時間というものは、退転の衆生が六道を輪廻する時間であると同時に、それをまた元の下種をちゃんと解脱成果させて成仏させようという、釈尊の熟益、脱益の教化の時間というふうにも、宗祖は両方の意味で書いておられます。でありますから、そういうことを受けた末法のわれわれが自分の信心において未来や三五を考えるということは、これは当然のこととして、宗祖がそこにこういうことを言われていることは、これは当然もう、理路整然として考えられたことです。『春初御消息』の内容は他の確実な遺文の内容と合致しています。したがって書誌学的には問題としても、内容はまさしく考えられることである。

こういうふうに見える、日蓮聖人の五百塵点というものは少なくとも二回考えなきゃならない。経説と、それから、それとは別の末法のいわゆる下種を受けたわれわれが自分の未来に対して考える主体的な三五塵点。というふうに見れば、そこに二個の五百塵点というのが出てくるわけです。さらに、先ほど言いました、この久遠下種が最初だということが、三種教相によって明らかになり、それを頂点として、この三種の教相というものが考えられたならば、じゃ、いったい久遠下種というのはどうということなのかということが当然、論理的に追求されてくるわけで、言わばこれは久遠の滅後末法の下種のが久遠下種であるなどというふうに考えられてくるわけです。そうすると五百塵点が三つになってくるんです。というわけで、実は日隆聖人のこの「くり返し塵点」などと批判されている考え方は、これは、日蓮聖人の考えと、これを少し敷衍、論理的に展開すると隆師のそういう考え方になってくると思われるわけです。そうすると、隆師の塵点義が、これは執行さんが言われたことですけれども、「繰返し顕本」として誤謬だと言うならば、宗祖の顕本義も、これも誤りということになってきます。しかし、宗祖が誤っているとかいうことは誰も言いたくないし言えない。そこで、望月欲厚さんなんかは、始即本というような考え方によって法身正意の三身義が法華の正意とする説をお持ちです。なるほど、報身説とは矛盾するけれども、宗祖の本意は法身正意ということで、この報身顕本と無始無終を矛盾なく解説しようとしてる。しかし、これも先ほど田村先生が挙げられたように、これは宗祖の義としてはおかしい。やっぱり宗祖は久遠実成、実修実証、報身顕本。しかし、無始無終ということをかむすために恐らく望月さんは法身を結論とされた。また、北川先生はこの宗祖の、信心のその心中において無始無終を感得されたんだというような。つまり宗祖のお心に無始無終のことを帰着させた考えによって、この宗祖の義が、考えられなくはないというふう

に言われる。しかしそれも結局はそうなる、宗祖の心中に無始無終を見られたということは、それはそうでしょうけど、そうなる、客体的な釈尊の無始無終ということにならない。ということ、結局、話は元に戻ってしまうということになるわけです。(客体的な釈尊の存在を述べられた別の論文もあります。) そうなると、これはもう有限な数をいくら積み重ねたところで、それは無始無終にはならないという数学上の考えによって、誤りだと言われればこれはどうにもならんことで、そうなる、実際これは宗祖の義が誤っているかなということになりかねないんです。

h、有限で無始無終とは〔資料、本誌19号62頁〕

私はこのことをいろいろ考えていたんですが、大変突飛なことを言つて笑われそうですけれども、この間亡くなったステイブン・ホーキングという方がおります。このホーキングさんが宇宙物理学に関するいろいろな本を出しています。最近の宇宙についてはビッグバンによって宇宙が始まったとされて。このビッグバンの始まりにおいては観測によってその証拠が観測されていますからまず間違いないだろうといわれている。ただ、最後にどうなるだろうか。これはもうブラックホールになると考えられているんですが、これは最後になったときは実験のしようもないし、われわれもおりませんから。第一ホーキングさんも自分の考えていることはただ考えていることであつて、実験も証明もできないなどということは言われていますが、ホーキングさんの考え方は無境界宇宙と言われます。このビッグバンとブラックホールのところは特異点と言ひまして。特異点というのは、アインシュタインの相対性理論とかのなかではこれがどうにも解決ができない、そういう特別な点で特異点と言うんだそうです。これをホーキング氏はその相対性理論の上に量子論というものを加えた、そういうことにおいてこれを解決しようとして、そしてそれも数学的に示した。その数学的に示したところが面白いですね。私は全

然ちんぶんかんぶんなんですけれども、虚数などという数字を用いて数学的に計算を示して。そしてその結論が面白いのは、宇宙というのは有限であって境界がないという。縁がないということなんです。こういう結論が出た。で、この宇宙論が正しいかどうか、これは分かりませんし、いろんな宇宙論がありますから、ホーキングさんの宇宙論が唯一だというわけではないんですけど、私が面白いと思うのは、これを証明した数学。虚数を使った数学。その数学で計算したことについては、いろんな学者が誤りだとは誰も言っていないです。そうすると、言葉の上では矛盾していても、有限であって境界がない。つまり、縁がないということは数学でも言えるってことになるでしょう。宇宙論がこれだということを言ってるんじゃないですよ。ただ、こういう宇宙論としてホーキングが計算したことが、その数式について誤りであるという議論はない。ということは、有限で縁がないということは、有限で、それが無始無終になる可能性も否定しない。どうでしょう？ で、もし、そういうことが数学的に言えるのであれば、これは望月徹厚さんが言われたような日隆の頭本論は形式的誤謬だというようなことにはならない。日蓮聖人の場合だって、久遠実成実修実証と同時に無始無終だと言って、それは間違いとは言えないということになるんじゃないかなと。この辺はもつと数学の専門家に聞きたいと思ってるころなんですけど。で、今のところ、こういうことがもし言えるのであれば、この宗祖の場合も、隆師の場合も問題はないということになるだろうと、私は思っているところがあります。それは、要するに実際の問題は、一つの五百座点と次の主体的な五百座点。そういう二つの或いは三つの五百座点の間で、論じられるのがわれわれの数学の問題でありますから、そこでいろいろ議論したらいい訳です。その前提として、数学的に問題ない場合があるというのなら、もうそれで良いわけです。これが隆師の頭本論、ないしは宗祖の頭本論についての今の私の考えです。非常にとつともないことを申し上げましたが、皆さんのお考えを伺いたいと思うんです。そうする

と、私は日蓮聖人も隆師も顕本論として何ら誤りはないと。報身正意で、無始無終と。従って「本尊抄」で「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所頭の三身にして無始の古佛なり」という五百塵点乃至所頭の三身ということは、無限に経てゆく五百塵点というふうには解釈することができるとではないかと、そう思うわけです。しかし、田村先生が指摘されたこの問題は大変重いものですから、しっかりと考えたいということに加えて、以上は今の私の、ほんとの管見でございます。お笑いださいます。そういうことで一往、布施先生が提起された問題については、あらあらですけれども、私見を申し上げました。

#### 四、日隆教学のキーワード

(一) 教学の全体系から(根本(根)三義)(資料、本誌19号62頁)

最後に日隆教学のキーワードというのをちよつと皆さんと一緒に考えたい。先ほど見ましたように、教学の全体系からしますと、久速下種・上行付嘱・末法下種はともに総名南無妙法蓮華經。で、これが日隆教学の根本三義であり、それはまた、日蓮教学も同じとみられている故です。根柢の三義ということもできる。このことについては、隆師の「弘経抄」第一巻、本門流通大意。この本門流通ということにおいて、法華經を解釈しているところの大意の下、四義三重というのが提げてありますが、四義の内容は久速下種・上行付嘱・末法下種。これを主題にして共に総名南無妙法蓮華經ということを論じているわけです。ですから、日隆教学の全体系を見たときに、一番大事な問題は久速下種と上行付嘱と末法下種。なかならず今日の法華經における上行付嘱の教義を考へることにおいて、久速下種や末法下種もしっかりと理解できるといふことで、隆師は当時の人々の言い方であった「云口」(隆師の発音はユイクチ、ユヒクチ)という言葉を使って、上行付嘱が「云口」だといふふうにも言わ

れております。(上行付囑の教義を前提に他の教義を考えるとということです。)

(二)日隆教学の教観〔資料、本誌19号63頁〕

さらに、この日隆教学の教観というものを考える。これは「五時四教名目見聞」にある「尼崎流として諸御抄の教観を一言に口伝する事之れ有りや如何。口伝に云く、諸教は五味、法華経は五味主、迹門より本門は下機を撰す。教弥実位弥下云云、是也」。このところは「四信五品鈔」の場合は「迹門より本門は機をつくす」となっていますが、隆師は必ず「下機を撰す」と引いております。で、これが日隆教学の教観だと隆師は言うわけです。「教」は「諸教は五味、法華経は五味主」。つまり、先ほど言いました五味主の教相。で、「観」は「迹門より本門は下機を撰す、教弥実位弥下」で、ここで注目されるのは、普通、日蓮教学の教観となりますと、観は題目だというのが一般なんですけれども、隆師は「迹門より本門は下機を撰す、教弥実位弥下」。これがわれわれの「観」だということは、つまり、先ほど来申し上げております下機に対する題目ということが常に隆師の考えです。それを、御遺文では幼稚・貧窮・孤露・悪人等と表現されています。そういうような観点から教と機を不可分に考えられた。これが観心(実践)の上で大事なこととされる。で、しかも、この教相と観心は別じゃなく、教即観・観即教。だから、法華経の本門は、お経としては教えを説いているようだけれども、実はそこに観心を説いてるんです。本門無教、教即観心。「弘経抄」のなかに、あちこちにこういうことが出てきます。これが日隆教学の教観である。だから、別の言い方でいうと、一秘即三秘、三秘即一秘。こういうことにもなっているわけです。これが隆師の教観でありまして、そこに、機というものに対する隆師の非常に深刻な見方というのがあります。そこで面白いのが、その次の文章。「諸門流の人人は上行菩薩に勝れたる釈尊第一の御弟子なる故に、釈尊より直授して之を取るなり。日存・日道の両師は数ならざる下劣の御ことにて之れあり。故に釈尊より

以要言之して上行の御手に請取りたまひたる妙法蓮華經を、日蓮大士の御手より取りたまふなり。所謂る本門八品是れなり」。なんかちよつと皮肉つぱく言つております。しかし、これは上行付嘱ということを強調される隆師の本意なんです。だから、先ほど申し上げたように、何で隆師以外の方たちが上行付嘱という教義を問題にしないのか。付嘱ということは言われるけれども、それはあくまで末法のわれわれからすると主体的に受け止めるべきものであつて、経のなかの教義としてはそれは論じないというのがほとんどの人の考え方なんですけれども、そうではないというのが隆師の主張なんです。それは恐らく、やつぱり末法の私どもに対する反省といいますか、機根に対する深刻な見方と。それがあつて、隆師は法体二重説でなく法体三重説をとり、そして、上行付嘱という教義を題目口唱と不可分のこととして、それを一番大事なこととして唱えました。これが隆師の教学の重要なことだろうと思います。

(三)末法下機の直視〔資料、本誌19号63頁〕

「此の如く法師品より神力品に至る経旨の本意は能開の要の釈尊、能開の要法を以て能開の要の上行菩薩に付嘱し、折伏逆化の不受余経一偈の要の無智の宗旨を立て、無智の日蓮を以て唱導と爲し、無智の悪人を以て所化と爲す。曾て自力を具せざる信心の弟子偏に法力経力を望む。能化所化のために説く処の未来記なり。若し爾らば日蓮大菩薩に十徳を備えざる中々の如説修行の行入なり」。このところは、天台大師の十徳というものが『法華玄義』序文に論じられていますけれども、それを捉えて、日蓮聖人にもその十徳が論じられるであろうかということ論ずるなかで、もちろんこの「自解仏乘」は日蓮聖人は上行の応化であるとかそういうふうの一つ一つと上げるんですけれども、それはしかし、聖人にとって本来の徳の考え方ではない。日蓮聖人が末法のために無智の宗旨を立てられた。宗祖自身が「無知の日蓮」と言われていることを考えなければならぬ。しかし、

また一方で「唯だ末代の唱導を無徳無行と計り云いては本門流通の日蓮宗の規模も頭われず宗旨の信心も立たざるなり」。あんまり無知の日蓮ばかり言ってたんではわれわれの信心は、おかしくなることもあるだろうと。「故に高祖の御本地は有智高德の薩埵なりと云へども、末代相應の不軽の先証無智日蓮と応同したまう日は無智無徳なり。而るに此の無智無徳が即ち正像の導師天台等の十徳に勝れたること百千万倍なり」。こんなふうの日蓮聖人の十徳を論じているのが隆師の立場でありますから、無知の日蓮ということは、恐らく、私は隆師の教学を考える上でのキーワードだというふうに通じているわけです。日蓮聖人の信奉者の方からは大変怒られるだろうと思いますが、しかし、こういうことでもって隆師の教学というものは、その教学を説いた日蓮聖人も例外ではない。日蓮聖人も例外ではないと。そういう教学なのだということが隆師の主張であります。そういうことを無知の日蓮というふうに言われた。こんなふうに隆師教学というものは、末法の衆生というものに対する深い反省の上に題目の信仰を捉える。題目、その題目を仏様が末法のわれわれのために、本門八品において上行付嘱の教義として伝えてくれた。その上行付嘱が基となって、日蓮聖人が御出現された。で、そういうことを根本として上行付嘱の題目を本尊として拝むということがわれわれの信行ということになる。そういうのが隆師の教学の結論になろうかと思えます。

##### 五、結語（教学と宗学）（資料、本誌19号64頁）

大変雑駁なことでしたんですが、最後にちょっとせっかくの機会ですので、申し上げたいことがあるのでお許しください。それは、隆師の教学の形成を考えているときに、先ほど方法論としてこういうことが言えるんじゃないかと申しましたけれども、隆師は結局日蓮聖人の教学というものをできるだけそのままに受けようと努力さ

れている。そして、それにとどまるのではなくて、その立場でもって、当時の時代思想に対峙し、そして、どうわれわれが生きて行つたらいいのかということを考えようとした。これが隆師の教学の姿だと思えます。そう思うときに、われわれが宗学というものをどう考えるかという問題。で、一般的には宗学というのは、これは宗派の学であつて、学問じゃないというような批判があるんですけども。しかし、一方で、仏教学が栄えて仏教は滅んだとされてそれを嘆く方もあります。あるいは、また、私はいつも思い出すんですけども、中村元先生が東大の最終講義で、「印度学はエジプト学か？」という提起をされた。これは、ずっと古い比較思想の本のなかにも取り上げられております。やっぱり学問というのは大事でありまして、真実を追究していく、その本義からすると、宗学のお考えを追求するのが教学研究ということになる。これは、しっかりと学問的手続きを踏んで、宗学のお考えに近づいていかなきゃならないんですけども、同時にまた、われわれがそういうことを踏まえて、過去の日蓮聖人の教えを踏まえて、現代・未来に対して、どういう生き方を考えていくべきなのかと。何を理想として生きていったらいいのか。これが、われわれにとつての宗学だろうと。ですから、宗学は決して宗派の学じゃなくて、宗（むね）とすべき学なんだと私はそう思つております。大変自分としてはそんなたいしたことはできないんですけども、いつも心のどっかに教学を学ぶということは、われわれがいったいどういうふうに生きていくことが宗学のお考えに叶うのかと。あるいは、さらに一人の人間として何をやるのか。やっぱりこれをいつも考えながら教学研究というのをやらなければならないと思えますし、それが、われわれの使命であります。で、そのなかで、いつも思うのが、私共の荊谷先生の法華経研究です。先生は法華経の一仏乗というのは、「一切衆生本来ぼさつ」だ。これが一仏乗ということと、常に荊谷先生はおっしゃっている。法華経が初期大乘仏教だということを前提としてこういう荊谷先生のお考えですけども、この「一切衆生は本来ぼさつ」というこ

れがこれからの地球の人の生き方として最も望ましいこととして考えられるんじゃないかなと、私なりにそういうふうなことを思っているわけです。菩薩という言葉は仏教の言葉でありますけれども、われわれの心のなかに本来ある尊いものをお互いに見いだし、助け合って生きていこうじゃないかというそれが法華經の教え。それを「一切衆生は本来ぼさつ」。ぼさつは、必ず成仏できるということでありますから、そういうところをわれわれはもっと共通して社会に訴えていけるんじゃないかなというふうに今、いつも思うわけです。まあ皆さん方が宗学というものをどんなふうにお考えなのか、それはまた教えていただきたいと思えますけれども、私はそんなふうに思つて、法華經が「名妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念」、であるならば、その「教菩薩」、一切衆生は本来菩薩と。これをみんなに訴えて、少しでも世の中を良くしていくことが立正安国につながるんじゃないかな。そんなふうに思つております。しかし、自分としては、全く反省ばかりですけれども、せっかくの機会ですから。皆さん、学問研究は大事ですけど、学問だけでは人は救えない。やはりそこにいかに人を救つていくか。これが立正安国。困つてる人を何とかしたいというのが宗祖のお考えですから、それをやっぱり私たちは忘れてはならない。そのためにも、しっかりと真実を求めていく学問が必要だということを考えているわけです。大変長い間、下手な話をして、しかも、声がこんな声で、大変お聞き苦しくて恐縮でございますが、長い間皆さん、ご静聴いただきました。ほんとにありがとうございます。こういう機会を与えていただけた西山理事長先生以下の方々、布施先生、ありがとうございます。心からお礼を申し上げます、これをもって終らせていただきます。ありがとうございます。

(拍手)

司会 大平先生、誠にありがとうございます。最後には私たち一人一人に対する非常に重要なメッセージま

で発していただきまして、また、後半も二時間にわたる熱弁をふるっていただきました。どうぞ、皆さま方、今一度大きな拍手をお願いします。

(拍手)

司会　引き続き、先生に貴重な機会ということもありますので、ご質問をぜひという方もいらつしやると思うんですけども、実は、先生のお話からもお伺いいただけたと思うんですけども、この講演自体が、私どもスタッフからの質問によって、もともとが先生がお答えになられたというそういうスタイルもございまして。丁寧に裏付けを持ちながら先生はお答えいただける。そういう先生でもいらつしやるんですけども。今回日隆聖人の教学について伺いたいということと同時に、もうお分かりでいらつしやると思います。大平先生がどのように日隆聖人の教学を捉えて、また、どのように宗学、日隆教学と向き合っているかと。直接お声を聞きたいという気持ちからお招きしたというそういう要素が強いわけでございます。で、既に、実のこと申しますと、先生にいろんなこと聞きたいというお声も届いてはいるんですけども、恐らくは先生の精密な、またそれは精密なご研究、これからあるんだと。こちらの質問用紙すべてお見せしたいと思えますので、その質問内容は、今後の大平先生のご研究に反映されるというふうなことでご理解いただければと。もう既にこういう時間になつておりますので。ただ、代表としてこの会の理事長でございます西山先生、何かコメントございましたならば。

西山茂氏　いいや、大変ありがたいお話を聞かせていただいて、どうもありがとうございました。そういったところですよ。感謝だけです。

(以下、諸氏の御言葉は割愛)

(拍手)

全頁 南無妙法蓮華經。

司会 以上をもちまして、本日の講演、滞りなく終了とさせていただきます。どうぞ皆さん、もう一度大きな拍手を先生にお送りくださいませ。ありがとうございました。

〔編者付記〕

今回の講演録も、前篇（本誌19号所収）と同様に、法華コモンズ様の御厚意により、当日の記録媒体を御惠贈頂いたことで実現しました。記録媒体の取り扱いについては茨木正則氏の助力も得たことをここに記し、改めて関係の方々に謝意を表します。

なお当講演は、布施義高「〔半日集中講座〕大平宏龍先生「日隆教学の形成と特色」」「法華コモンズ通信」創刊号、二〇一八年八月一日、五〜六頁でも紹介されました。